

初年次セミナーを中心とした初年次教育の展開 —カリキュラム共通化の意義—¹

矢島彰²・安保克也³・佐藤智明⁴・松田孝一⁵

大阪国際大学

Development of First-Year Experience based on Freshman Seminar - Significance of Common Curriculum -

Akira YAJIMA・Katsuya ANBO・Tomoaki SATO・Koichi MATSUDA
Osaka International University

本稿は、初年次セミナー科目を中心とした初年次教育の実践報告である。大阪国際大学では、2008年度学部改組にあわせて、これまで経営情報学部でのみ実施していた初年次セミナーカリキュラムの共通化をキャンパス全体2学部に拡大して実施することとした。全学科に共通する基盤能力を育成するため、Generic Skillsを意識した8つの共通プログラムを決定し、経営情報学部初年次セミナーテキストを、より一般的なものに大幅に改訂して出版した。さらに大学独自の内容はガイドブックにまとめ、初年次セミナーテキスト指導者用マニュアルを作成した。初年次セミナーの担当者会議を学科・学部・キャンパス単位で組織し、共通プログラム・共通テキストによるセミナー運営についての教員研修も実施した。セミナーを少人数化することにより、初年次セミナー担当者数は増大し、初年次セミナーは教員にとっての共通担当科目になった。

カリキュラムはスタディ・スキル系、スチューデント・スキル系、オリエンテーションやガイダンス、学びの導入を目的とするもの、キャリアデザイン、を主としている。共通化の意義は、教員の科目担当共通化、カリキュラム共通化、スケジュール共通化、共通テキスト作成、といった様々な面に存在する。これらは教員のグッドプラクティスの共有に繋がり、実質的なFD活動となった。

〔キーワード：初年次教育、初年次セミナー、カリキュラム共通化、FD活動、組織、Generic Skills〕

1. はじめに

近年、初年次教育が日本の大学で注目されている(藤田, 2006; 山田, 2008)。2007年に国立教育政策研究所が行った調査では、97%近くの大学が初年次教育を実施しており、大学にとって専門教育に匹敵する大きな課題となっていることが伺われる。実際に、大学において初年次教育を推進するには、様々な問題をクリアしなければならないが、そのひとつに教員の組織づくりおよび全学上げての取り組みが挙げられる(小野, 2007; 瀧澤 他, 2007)。

1 謝辞：アンケートに協力してくれた大阪国際大学2008年度1年次生に感謝を表します。

2 大阪国際大学現代社会学部 yajima@inf.oiu.ac.jp

3 大阪国際大学現代社会学部 anbo@lp.oiu.ac.jp

4 大阪国際大学ビジネス学部 satomo@md.oiu.ac.jp

5 大阪国際大学ビジネス学部 sugi2306@md.oiu.ac.jp

初年次教育には様々なプログラムが存在する。プログラムは8つの領域に分類して考えることができ(川島, 2008), 各大学は入学生の特性に応じて必要なプログラムを実施している。実施形態も様々であり, 初年次学生のセミナー科目で実施する場合もあれば, 初年次教育用の科目を開講して行っている場合もある(藤田, 2006)。

本稿では, 2008年度の学部改組に伴って実施された大阪国際大学における初年次教育カリキュラムのキャンパス共通化, 特に, 共通カリキュラム, 共通テキスト, 教員用マニュアルの作成と, 共通化の意義や成果について報告する。

2. 大阪国際大学における初年次教育の変遷

大学創設年度(1988年)より経営情報学部初年次のセミナー「基礎演習」においては, 教育方針や目標を示した手引きを作成していたが, 担当教員に十分に浸透するものではなく, 1998年度までセミナーのカリキュラムはほぼセミナー担当教員の裁量に委ねられていた。しかしこの間, 基本となる共通の学習経験にばらつきが生じたため, 3年次・4年次のセミナーにおいて, 再度初年次の内容を学習し直す必要性が生じた。また, 卒業研究や専門教育に必要な学習リテラシーも格差が著しく広がったため, その対策も必要となった。また, 学生が所属するセミナーを志望するわけではなく, 大学側が所属するセミナーのクラス分けを実施している状況で, セミナーによってカリキュラムが大きく異なることは問題であり, 学生も不満を持っていた。

そこで1999年度に初年次セミナーカリキュラム共通化が検討され, 2000年度セミナー共通テキストを作成し, 2001年度セミナー担当教員用マニュアルも作成した。2004年度には名称を「基礎演習」から「セミナーI」に変更し, 2005年度には短大を含めた全学部に対応した『セミナーI ガイドブック』を作成した。カリキュラムの内容は, テキスト・マニュアルと共に毎年検討し, 2007年度は, フレッシュマンキャンプに始まり, 大学生活ガイド, マナー教育, 基礎学力育成, 大学祭参加と続き, 資料分析プロジェクトIと呼ばれる5000字程度のレポート作成と履歴書作成で締めくくる内容で構成した。スタディ・スキル系, スチューデント・スキル系, オリエンテーションやガイダンス, 学びの導入を目的とするもの, キャリアデザイン, にリメディアル教育を加えた内容となっていた。

3. 初年次セミナーキャンパス共通化

(1) キャンパス共通化の概要

2008年度に学部改組が実施され, 枚方キャンパスの経営情報学部・法政経学部の2学部が, ビジネス学部・現代社会学部の2学部となった。初年次セミナーを共通カリキュラムで実施していた経営情報学部教員が両学部に分かれて所属することとなり(図1), カリキュラムキャンパス共通化がトップダウン式に決定された。初年次セミナーを共通プログラムとして実施することに慣れた教員と, 教員裁量で実施してきた教員が混在することになった。また, カリキュラムキャンパス共通化が決定された背景には, 全学生がスタディ・スキル, スチューデント・スキルに関する共通の教育を受けていることが, その後の専門教育の実施に不可欠であるという考えがあった。

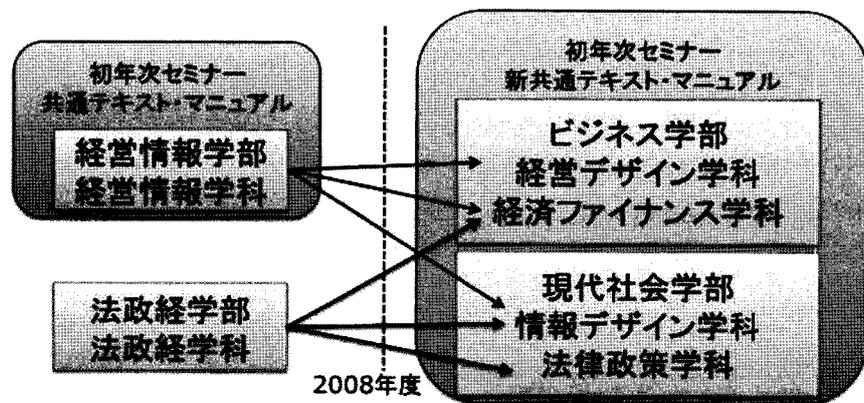


図1 初年次セミナーのキャンパス共通化

また、キャンパス共通化を契機に、これまでの経営情報学部で実施されていた「セミナーI」による初年次教育に関しても見直しがなされた。問題点として、①1ゼミ当たりの学生数が20名を越えるなど、少人数化がなされていない、②リメディアル教育を取り込むなどカリキュラムの肥大化、③セミナー担当教員にリメディアル教育を課している、といったものが挙げられ、2008年度からの初年次教育新カリキュラムでは改善することとした。

(2) カリキュラム共通化スケジュール

2006年11月に初年次セミナー共通化の提案・承認から実施までのプランを作成した。次に、骨子・基本教学方針を「キャリア教育の3本柱」(川嶋, 2006)および海外で採用されている「Generic Skills」(NCVER, 2003)を参考に作成した。そしてこれに教学システムを加えて、Committee Draftとした(佐藤・矢島・谷口・安保・奥井・田窪, 2008)。その後 Working Draftの作成に入った。2月までに、すでに基本共学方針および骨子は承認されていたため、その具体的な教学システムおよび共通プログラムを策定した。教学システムは、①1ゼミ当たりの学生の少人数化、②担当者会議の設置、③出席管理の徹底、④セメスター制の導入、⑤評価の共通化、とした。セメスター制の導入は、リメディアル教育を強化することを目的に、従来のゼミと分離して新たに1コマを複数ゼミ単位で実施することとした。これにより、「セミナーI」のカリキュラム肥大化に歯止めをかけることができた。また評価の共通化については、『セミナーIガイドブック』(佐藤・矢島・谷口・安保・松田, 2008)に明確に記載することで了承を得た。さらに共通プログラムは、①エンカレッジメントタイム、②オフィスアワー、③ライブラリーツアー、④共通テキスト・ガイドブック、⑤リサーチプロジェクト、⑥フレッシュマンキャンプ、⑦リメディアル教育、⑧地域社会(学内を含む)への貢献、の全部で8項目とした。最終的には2008年1月にFinal Draftが完成した。

2007年時点で経営情報学部にて使用していた、『セミナーIテキスト』(大阪国際大学経営情報学部セミナーI担当者会議, 2007)を大阪国際大学に特化した部分(例えば、学年歴、大学祭、フレッシュマンキャンプ、資料分析プロジェクト、ライブラリーツアーなど)と、一般的な部分に分け、前者を『セミナーIガイドブック』とし、後者は指導者用マニュアル付きのテキスト『大学 学びのことはじめ』(佐藤・矢島・谷口・安保, 2008)として出版した。リメディアル教育を除く8つの共通プログラムについては、『大学 学びのことはじめ』『指導者用マニュアル』『セミナーIガイドブック』の3点を用いて、教員の負担が過重なものにならないよう配慮した。学生には『大学 学びのことはじめ』『セミナーIガ

イドブック』の2点が配布されることとなった。

3月に入り、新学部セミナーI担当者会議を設置し、まず全体の運営説明会を2回実施した。2008年度になってからも、学部単位で数回、教員対象のフォローアップセミナーを実施し、理解を深めた。さらに、随時情報を共有できるようにメーリングリストを作成し、学習管理システム MOODLE にも、各学科、各学部、キャンパス単位でのセミナーI担当教員用コースを作成した。また、月1回程度、各学部・学科で担当者会議を実施することによって担当者相互の情報交換をスムーズにした。

4. 初年次セミナーカリキュラム

初年次教育の核となる科目は、「セミナーI」「ベーシックセミナー」からなる初年次セミナーであり、Generic Skills の育成を目的としている。Generic Skills とはあらゆる職業に転移可能な能力であり、具体的にはコミュニケーション力、批判的思考力、数的処理力、問題解決力、チームワーキング、IT 活用力、価値・態度等である。初年次教育と Generic Skills がほとんど重なるものであるといえる。数的処理やコミュニケーション力に含まれる語彙力の育成はリメディアル教育であり、問題解決力や批判的思考力の育成はスタディ・スキル系の能力育成であり、大学生の研究活動に対する広い意味でのガイダンス教育である。

「セミナーI」は、10名程度の少人数ゼミであり、共通テキスト・ガイドブック・指導者用マニュアルを用いている。「ベーシックセミナー」は、3ないし4ゼミをまとめた30人程度のクラスで実施し、リメディアル教育に長けた非常勤講師が担当する。コミュニケーション能力育成も目的とした科目である。

初年次セミナーキャンパス共通化において定めた8つの共通プログラムも Generic Skills の育成を目的としている。共通プログラムの内容と Generic Skills や初年次教育8領域の対応を表1・2に示す。

表1 共通プログラムと Generic Skills
(安保・矢島・佐藤・松田・石川, 2008)

	メントタイム	オフィスアワー	ライブラリー	共通テキスト・ガイドブック	プロジェクト	プロジェクト	リメディアル教育	地域社会への貢献
コミュニケーション能力	◎	○	○	○	○	◎	◎	○
批判的思考力				○	◎			
数的処理能力				○	○		◎	
問題解決力	○	◎	○	○	◎		◎	○
チームワーキング				○	○	○	◎	○
IT活用力			○	○	◎		○	
価値・態度	○	○	○	○	○	○	○	○

表2 共通プログラムと初年次教育8領域

	メントタイム	オフィスアワー	ライブラリー	共通テキスト・ガイドブック	プロジェクト	プロジェクト	リメディアル教育	地域社会への貢献
スタディスキル系		○	○	○	○		○	
チューデントスキル系	○	○		○			○	
オリエンテーションやガイダンス	○	○		○			○	
専門教育への導入		○	○		○			
学びへの導入を目的とするもの	○	○		○	○		○	○
情報リテラシー			○	○	○			
自校教育								○
キャリアデザイン	○			○				

「ベーシックセミナー」も Generic Skills の育成を視野にいれ、日本語、数的処理、レクリエーションスポーツの3分野を各5週ずつで15週とするカリキュラムとした。表3に「ベーシックセミナー」と Generic Skills の対応を示す。

表3 「ベーシックセミナー」と Generic Skills(安保・矢島・佐藤・松田・石川, 2008)

	セミナーI (10~15名のゼミ)		ベーシックセミナー (3~4ゼミ集合)	
	ガイダンス・スタディ スキル・キャリア教育		リメディアル教育	
			日本語	数的処理
コミュニケーション能力	○	◎		○
批判的思考力	○			
数的処理能力	○		◎	
問題解決力	○	○	○	○
チームワーキング	○			◎
IT活用力	○			
価値・態度	○	○	○	○

共通テキストの内容であるが、学生が卒業するまでの目標を卒業論文と就職とし、卒業論文作成のガイダンス教育を「スタディスキルズ編」、就職活動のガイダンス教育を「キャリアデザイン編」とした。その他、基本的なコミュニケーションに関するガイダンス教育を「キャンパスライフ編」としている。テキストには、カリキュラムの全体像(図2)および、「キャンパスライフ編」、「スタディスキルズ編」、「キャリアデザイン編」のチャートを載せ、初年次セミナーの位置づけを学生に対して明示している。目次は表4に記した通りである。マナー、クリーンアップ、大学祭、手紙の作成といった項目が特徴的である。

表4 『大学 学びのことはじめ』目次

Part ONE キャンパスライフ	
Chapter 1 ガイダンス	1 ゼミの友達の名前を覚えよう 2 自己紹介をしよう 3 シラバスを見よう 4 図書館を使いこなす
Chapter 2 相談	1 オフィスアワー 2 エンカレッジングタイムとは 3 学生相談室の案内
Chapter 3 課外活動	1 課外活動のすすめ 2 大学祭
Part TWO スタディスキルズ	
Chapter 4 受講	1 受講の心得 2 ノートのとり方 3 資料整理技法
Chapter 5 理解と表現	1 音読のすすめ 2 文章要約と作文 3 比較分析演習 4 読書レポート作成—夏休みに本を讀もう— 5 夏休み予定・報告レポート
Chapter 6 リサーチ	1 テーマの設定方法 2 レポートの作成方法 3 情報の集め方 4 グラフの作成方法 5 リサーチレポート作成実習 6 口頭発表演習
Part THREE キャリアデザイン	
Chapter 7 社会意識	1 マナー 2 手紙の作成—大学生生活近況報告— 3 ボランティア活動 4 クリーンアップ作戦
Chapter 8 社会人への一歩	1 卒業生講演会 2 資格取得に挑戦してみよう 3 自己診断から履歴書の作成へ

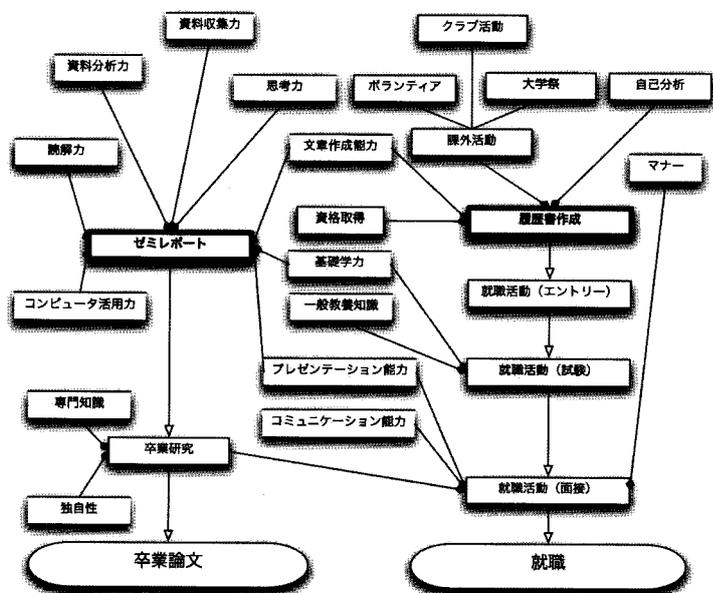


図2 卒業論文作成と就職までの流れ
(佐藤・矢島・谷口・安保, 2008)

「ベーシックセミナー」3分野の内容であるが、日本語分野は、『大学生のための日本語再発見』(小野・林部, 2006)のアクティビティ教材用いたペアワーク、数的処理は、専門分野で扱う数量を題材としたリメディアル教育、リクリエーションスポーツは、競技力向上ではなくコミュニケーション能力育成を目的としたチームスポーツが実施されている。

5. カリキュラムキャンパス共通化の意義・成果と課題

(1) 共通担当科目

カリキュラム共通化と同時に、セミナーを少人数化したため、役職者を除くほぼ全教員が初年次セミナーの担当教員となった。カリキュラム共通化の意義や成果は、初年次セミナーが共通担当科目となった効果と複合的なものとなった。

(2) カリキュラム共通化

共通カリキュラムであるから、全教員が把握する全学生共通学習単元が存在し、それを前提とした授業が実施可能になったことは大きな成果である。また、「セミナーI」でのグッドプラクティスを共有し、他科目への転移も可能となったことは、極めて実質的なFD活動である。共通カリキュラムの効果をもう一つ挙げるなら、大学の理念を具現化する場所になり得る点である。大阪国際大学の場合、建学の精神は『全人教育』を基礎として、礼節を重んじ、世界に通じる心豊かな人間を育成します。」であるが、授業科目で具現化させることは難しい。大阪国際大学では、「セミナーI」において「マナー」を扱う。大学の理念の具現化は広い意味での自校教育ともいえる。

(3) スケジュール共通化

スケジュールの共通化にも大きな意義がある。他の授業との連携は、全学生が共通スケジュールで「セミナーI」を実施することによって容易となる。また、スケジュールの共通化は、「セミナーI」授業を複数ゼミによる合同授業で実施し、教員間でのグッドプラクティスの共有を可能とする。「セミナーI」では、大学祭参加、レポート作成、自己分析などの単元において、指導に長けた教員主導による合同授業が実施された。さらに、スケジュール共通化の効果として、「セミナーI」によるイベントを同時期実施することにより、学生の大学への帰属意識を高めることができたことが挙げられる。レポート作成イベントであるリサーチプロジェクトのスケジュールもキャンパス内共通であったため、全学的なイベントとしての認識が高まり、学生のやる気を引き出すことができた。

(4) 共通テキスト作成

共通テキスト作成の意義として、教員の力の結集と、初年次セミナーの目標を学生に明示できることが挙げられる。新任教員にも1単元以上の作成を依頼し、多くの教員が部分的には作成に携わっているテキストにする。テキスト作成やマニュアル作成も実質的なFD活動といえるだろう。また、シラバスを読まない学生が多い中、初年次セミナーのような内容が多岐にわたる科目は、その目標が学生に伝わりにくい。共通テキストは学生に対して初年次セミナーの内容を的確に伝えるアイテムである。

(5) 共通化の中での polymorphism

初年次セミナーキャンパス共通化による成果として、キャンパス共通化の中に学科特性を産み出そうとする動きが活発となったことが挙げられる。校外実習および地域・学内へのイベント参加は、セミナーと実社会を結ぶためには重要な共通プログラムであるが、共通プログラムではあっても、学科によって実施内容・形態は異なり、学科特性が発揮されている。共通プログラムに polymorphism (多形性) が見いだされている。共通プログラムが、学生に対して、大学に対する帰属意識と学科への帰属意識の両者に寄与している。

(6) 成果

1年次学生対象の価値観・態度に関するアンケート結果を図3に示す。大学入学時と比

較をすると、自分の意見を話すようになった点、グループ活動を盛り上げるようになった点、問題解決能力を身につけた点などで効果があったといえる。

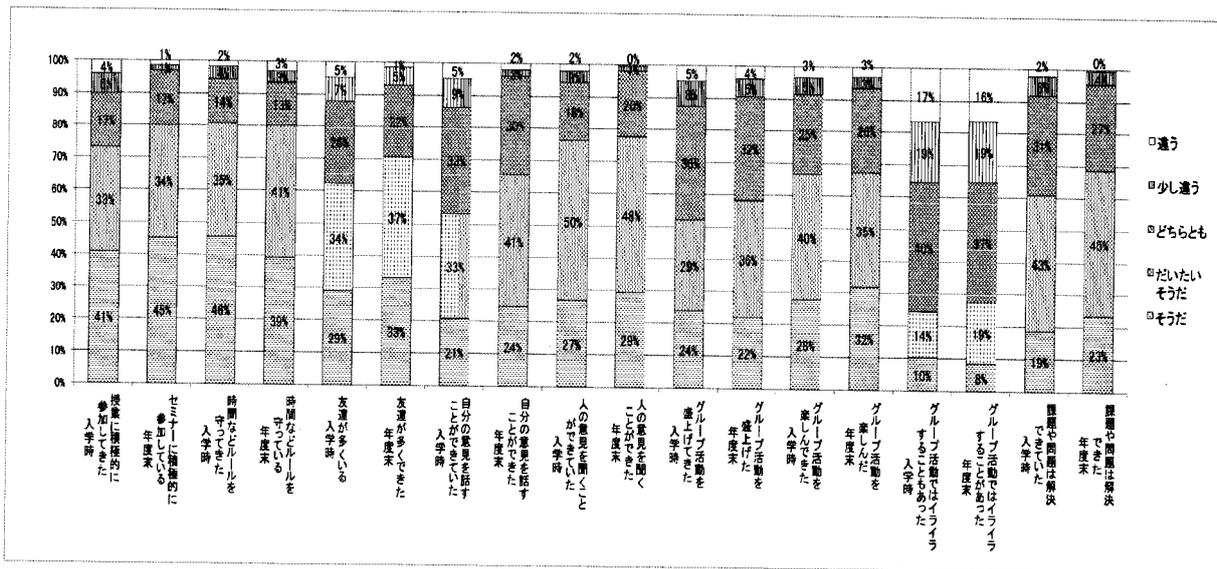


図3 1年次学生価値観・態度の入学時・年度末比較 (入学時 n=360・年度末 n=201)

「ベーシックセミナー」においては、コミュニケーション能力や各分野での価値・態度の育成が、目標通りに達成されていること(矢島・屋葺・柄澤・朝倉・田中, 2008)も成果の1つである。入学時と前期末における学生の態度の変化を図4に示す。

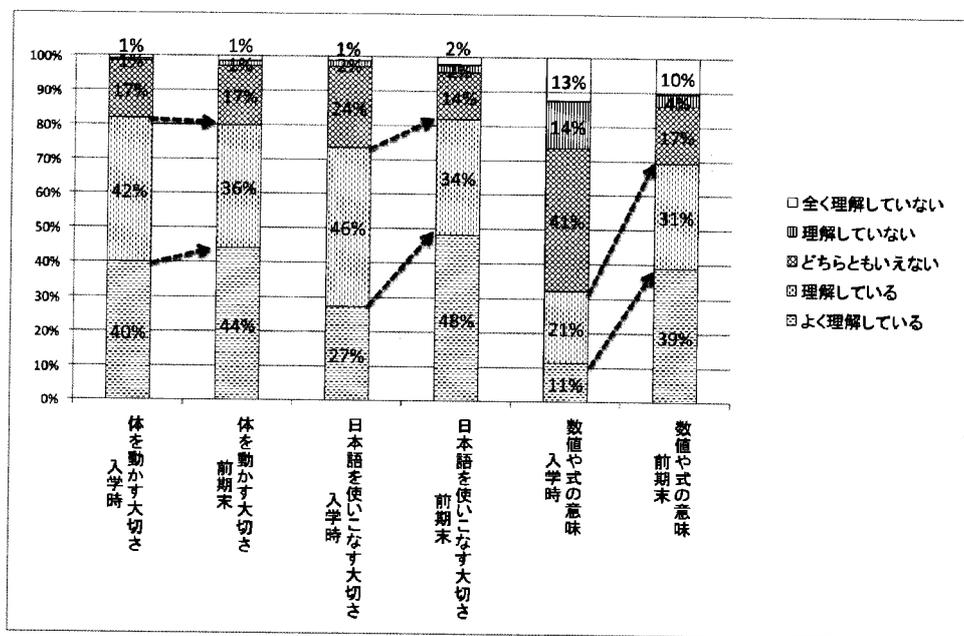


図4 「ベーシックセミナー」による態度変化 (入学時 n=360・年度末 n=246)

(7) 課題

リメディアル教育科目である「ベーシックセミナー」での学生の学習状況をセミナーI担当教員へ伝えるしくみが確立されていないことが問題点である。

また、2年次セミナーへの接続については現在も議論が継続されている。初年次セミナーより学科特性を活かしたカリキュラムが要求されており、キャンパス共通のテキスト・マニュアル作成などは考えられておらず、学科に一任されている。その一方で、いくつかのキャンパス共通プログラムの実施も決定されている。ここでも polymorphism が重要となるであろう。初年次セミナー共通テキスト指導者用マニュアルにおいて、共通の教材を学科特性や学生の状況に応じて利用する術を記載する必要もあると考えている。

6. おわりに

初年次教育への組織的な取組みは、現在もなお困難が伴うとはいえ、数年前よりは容易になっている。初年次教育に対する関心の全国的な高まりや、初年次教育学会の設立も、初年次教育推進に多くの教員の力を得る上で大きな役割を果たしていることを実感し、学会の存在には感謝している。

参考文献

- 安保克也・矢島 彰・佐藤智明・松田孝一・石川高行 (2008) 「Generic Skills の獲得を目的とした初年次セミナーカリキュラム」『日本リメディアル教育学会第4回全国大会発表予稿集』, 87-88
- 藤田哲也 (2006) 「初年次教育の目的と実際」『リメディアル教育研究』, 1(1), 1-9
- 川島啓二 (2008) 「初年次教育の諸領域とその広がり」『初年次教育学会誌』, 1(1), 26-32
- 川嶋太津夫 (2006) 「キャリア教育のあり方について考える」『京都女子大学第2回現代GP研究会講演』
- NCVER (2003) Defining generic skills, (<http://www.ncver.edu.au/research/proj/nr2102b.pdf>) (2009年6月30日閲覧)
- 小野 博 (2007) 「入学前・初年次・リメディアル教育の実施に際し、学内全体を巻き込む知恵」『日本リメディアル教育学会第3回全国大会発表予稿集』, 1
- 小野 博・林部英雄監修 (2006) 『大学生のための日本語再発見』旺文社
- 大阪国際大学経営情報学部セミナーI 担当者会議編 (2007) 『セミナーI テキスト』
- 佐藤智明・矢島 彰・谷口裕亮・安保克也 (2008) 『大学学びのことはじめ』ナカニシヤ出版
- 佐藤智明・矢島 彰・谷口裕亮・安保克也・松田孝一 (2008) 『大阪国際大学枚方キャンパスセミナーI ガイドブック』
- 佐藤智明・矢島 彰・谷口裕亮・安保克也・奥井秀樹・田窪美葉 (2008) 「大阪国際大学の初年次教育における組織作り」『日本リメディアル教育学会第4回全国大会発表予稿集』, 103-104
- 瀧澤達也・石井康夫・村上 洋 (2007) 「麻布大学におけるリメディアル教育の試み」『日本リメディアル教育学会第3回全国大会発表予稿集』, 3
- 矢島 彰・屋葺素子・柄澤健史・朝倉洋子・田中佳子 (2008) 「『大学生のための日本語再発見』 アクティビティ学習の効果」『日本リメディアル教育学会第4回全国大会発表予稿集』, 75-76
- 山田礼子 (2008) 「初年次教育の組織的展開」『初年次教育学会誌』, 1(1), 65-72